

リベラルアーツと工学の融合、未来社会への提言

中部支部副幹事長 辻篤子

「リベラルアーツと工学の融合 未来社会への提言」と題し、東京工業大学 特命教授である上田紀行氏による第20回 EAJ 中部レクチャーが2024年9月20日、日本工学アカデミー中部支部主催、同関西支部と東海学園大学の協賛により、同大学で開催された。上田氏は、NHK出身のジャーナリストである池上彰氏らと共に東工大でリベラルアーツ教育を推進したことで知られ、この春からは東海学園大学の特命副学長・卓越教授も務めている。よき工学に向かうには何が必要か。そのためにリベラルアーツが果たすべき役割とは。議論が交わされた。

そもそも、なぜ東工大でリベラルアーツなのか。

文化人類学者である上田さんが1996年に東工大に赴任したとき、学生たちからは本質的な質問がどんどん出てきて、がんばって教えなければと思っていたそうだが、20年ほどたつて明らかに変わり、自分の評価を気にし、出された問題は解けるが、自分で問題を作ることができない、問題待ちの学生が増えたという。

背景には、1990年代に入って、大学はもっと社会に役立つ人材、即戦力になる人材を送り出すべきだという圧力が強まり、大学院重点化や教養部解体が進んで、専門教育重視の改革が進んだことがある。その結果、根源的な問いを持たず、外からの評価ばかり気にする学生が増えた。これではイノベーションどころではないのではないのか。

そこで登場したのがリベラルアーツ教育だ。とはいえ、かつて教養科目といわれていたものではなく、リベラルとアーツ、つまり、人間を自由にする技術なのだという。起源は古代ギリシアにさかのぼり、アリストテレスのような自由市民は知を総動員して考え、議論する一方で、奴隷は自由市民の命令を着実に遂行する。

では、現代の我々は自由市民か奴隷か。レポートの課題に対し、評価軸はどこかと尋ね、教わった通りに揃って同じ答えを出す。そういう学生は果たして自由市民なのか。実は、現代の日本で人間の奴隷化が進んでいるのではないかと上田さんはいう。さらに問題なのは、日本社会ではトップもまた奴隷だということだと容赦がない。奴隷も、自由市民のもとでなら自由市民へと高まっていくことができる。かつての松下幸之助、本田宗一郎、盛田昭夫といった親分のもとでなら、奴隷仕事をしているうちに、トップのオーラで自由市民の仕事ができるようにもなる。しかし、昨今の雇われ社長の場合、いわば奴隷のために奴隷が働かされるようなことにもなり、救いがない。企業だけでなく、大学や高校の先生もそうかもしれない。奴隷のために働かされる情けなさをどうやって突破していくのか。どうやって自由市民を増やしていくのか。それが日本にとって大きな課題であると、話は社会のあり方に広がった。

実際、大企業からリベラルアーツの指導をと頼まれることも多いそうだ。リベラルアーツ教育が軽視され、即戦力が重視される中で育った学生たちが今ちょうど40歳くらいになって、企業で管理職になろうとしているわけだが、自分の軸やビジョンがなく、細分化された中で最適化されてしまっただけでは、部下にも業績をあげろというしかない。そんな奴隷のような管理職にしかねないとして、リーダー研修、リ

ベラルアーツの再教育、リカレント教育が求められているのだろうと上田さんはいう。

リベラルアーツ教育を展開するに当たって海外の大学視察に行った折、マサチューセッツ工科大学 (MIT) で衝撃を受けたという。最先端科学を教えても、数年で使えなくなる。分野ごとなくなることである。つまり、先端だけやっていた人間は使い物にならない。どんな時代にあっても新たなチャレンジができる人を MIT は育てるのであり、その点では例えば、仏教やキリスト教は、2000年、2500年前から、リニューアルしながら今でも人々を支えている。MIT ではこういうことを学ぶことを大切にしているというのだ。

初期条件があって、そこで最適解を出すようなことをやっていないか。そんな問題なら AI に任せた方がいい。そこに誘導する教育はわざわざ AI に負ける教育をしていることになる。

リベラルアーツセンターが2011年に設立され、2016年からはリベラルアーツ研究教育院で新たなプログラムが始まった。印象的なデータが示された。約1万人の学生がいる東工大で、生協で売れた人文社会系の本は、2015年の4、5月にはわずか75冊、それが2016年には786冊、2017年以降は1300冊程度で推移しているという。驚くべき変化と言っている。そして、着実に、生意気な学生が育ってきたという。

今の懸念は、そうした生意気な人材を、果たして日本の会社が活かせるのか、ということだ。企業は、口を開けば個性的な人材がほしいというが、本当に活かせるのか。リベラルアーツと縁のないまま過ごしてきた上司が、専門とは違う発想に対して、「10年早い」などと言わないか、心配だという。

工学には力がある。だからこそ、よい工学が求められている。それを担う人材はどうあるべきか、根本から問い直せ。重い問いが投げかけられた。



第20回 EAJ 中部レクチャー

リベラルアーツと工学の融合、
未来社会への提言

上田紀行 氏
東海学園大学 特命副学長・卓越教授、東京工業大学 特命教授

2024年 9月20日 (金) 16:30~18:00

主催: 日本工学アカデミー 中部支部
協賛: 日本工学アカデミー 関西支部
東海学園大学

◆画面の撮影や録画、録音はご遠慮ください
◆講演中のご質問は、Zoomの「挙手」機能で



日本工学アカデミー (EAJ) 中部支部 EAJ

タイムスケジュール

- 16:30 開会 (進行: 伊藤みほ / EAJ中部 企画推進部会)
挨拶 (林良嗣 / EAJ中部 支部長)
挨拶 (石川 清 / 東海学園大学 学長) …確認中
- 16:35 講演 (60分)
上田紀行 氏
- 17:35 質疑 (20分)
- 17:50 閉会挨拶 (太田光一 / EAJ中部 副支部長)
- 17:55 閉会
- 18:30 懇親会

